



TOPICS ① 専門家の力を「がん総合診療部」のもとに集結させ、がん医療の砦として地域の未来を支えます。

名大病院では、高度化するがん医療に対して院内全体で取り組むために、2026年5月「がん総合診療部」を設置しました。設立の背景や部門間の連携が生み出す新たなメリットについて、がん総合診療部長の梶山広明副病院長にお聞きしました。



▲梶山広明副病院長

世界希少・難治性疾患の日 (Rare Disease Day) の関連イベントを開催しました。

世界で約3億人が罹患しているとされる希少・難治性疾患への理解を深めることを目的として、2026年4月21日に『RDD2026 in 名古屋大学医学部附属病院』を開催しました。

本イベントは例年、NPO法人愛知県難病団体連合会が主催していますが、今年度は初めて当院との共催による実施となりました。

会場では、難病に関するパネル約30枚を展示したほか、患者さんや支援者が交流できるスペースを設け、多くの来場者で賑わいました。

また、当院の難治性疾患診療部に属する4つのセンターから、各疾患の病態や治療法に関する講演を行い、イベント全体で約100名にご参加いただきました。



医療チームとして全体が連携し 共通リソースを有機的に活用

がん総合診療部は、成人がんの診療とともに情報収集や対策案を検討する「成人がんセンター」、小児に対応する「小児がんセンター」、他院では対応が難しい症例を受け入れる「希少がんセンター」の3本柱で構成され、相互に連携します。さらに、関係診療科・支援部門、がんゲノムを扱うゲノム医療センターとも連携し、緩和ケア、遺伝カウンセリング、がん相談、AYA支援、院内がん登録などの機能を「共通リソース」

と見据えて、院内すべてのがん医療を統括する「がん総合診療部」を設置しました。これは、高度ながん医療を提供し続けてきた当院の役割を地域にわかりやすく発信すると同時に、医療構造の変化に立ち向かう当院の気概を示すものでもあり、全スタッフが一つの屋根の下、心を一つにして診療にあたれる仕組みをつくりました。

これまで当院では、各診療科をはじめ、ゲノム医療センター、化学療法部、地域連携・患者相談センターなどが、それぞれの専門性を活かしてがん医療に取り組んできました。しかし、院内全体で情報を共有し、課題解決を検討する共通のプラットフォームが存在しないことが課題でした。

総合病院の強みを活かし 「最後の砦」として地域を支える

当院のがん医療の最大の強みは、総合病院としてがん以外の多様な疾患の専門家が揃っている点にあります。一般的ながん専門病院では対応が難しい心臓病や重度の糖尿病、透析が必要な腎臓病の患者さんに対しても、当院の各専門医が連携することで、安全に高度ながん治療を提供できます。

「がんが再発した」「合併症のためこれ以上の治療は難しい」とされた患者さんにとって、その後の治療は人生の岐路となります。そんなとき当院であれば、各医師の専門性を横断的に結集させることで、新たな選択肢を提示できる可能性が広がるのです。

また、大学病院として診療で得た知見を研究に還元し、次の先端医療へつなげることも当院の役割です。困難な症例の前でも私たちは決してあきらめることなく、これからも地域の皆さまの「最後の砦」として、一人でも多くの患者さんを救いたいと願っています。

ハローキティが名大病院を訪問

2026年4月22日、株式会社サンリオのキャラクター、ハローキティが名大病院の小児病棟を訪問しました。本訪問は、サンリオの社会貢献活動「Sanrio Nakayoku Project」の一環である「Sanrio Character Aid」によるものです。この活動は、ハローキティが世界中の病院や施設、被災地などを訪れ、病気や障がいのある子どもたちをはじめ、多くの人々に笑顔を届けることを目的として行われています。

当日は、入院中の子どもたちと手遊びや写真撮影を行い、プレゼントも手渡してくれました。子どもたちはもちろん、ご家族や医療スタッフにとっても心温まるひとときとなりました。



外来棟1階に医学部史料館所蔵史料の展示を設置しました



附属図書館医学部分館では、医学部史料館の所蔵史料を活用した展示を、令和8年3月30日に外来棟1階に設置しました。

本展示は、本学医学部の歩みや医療の歴史を知っていただける内容となっています。

第1回の展示品は「桐原式軟性胃鏡」です。

名古屋医科大学教授であった桐原真一が、ウォルフおよびシンドラの軟性胃鏡を改良し、昭和12年(1937年)に完成させました。先端が手元の操作によって屈曲する構造を持ち、数多くの胃内観察や胃内部の写真撮影が試みられるなど、日本における内視鏡診断の発展に寄与しました。

医学部史料館と併せて、ぜひご覧ください。

※医学部史料館の見学は事前予約制です。

<https://www.med.nagoya-u.ac.jp/medlib/museum/reserve.php>



教えて!

この言葉

血液透析

血液浄化部長 加藤 規利

血液透析とは、腎臓の働きが弱くなったときに、血液を体の外に取り出してきれいにする治療です。「ろ過」と「拡散」という原理を応用して、血液から老廃物や余分な水分を取り除き、再び体に返します。日本では1970年頃から治療が普及し始め、現在では50年以上透析治療を継続されている方もいらっしゃいます。中学や高校で習うような基本的な物理現象を利用して、この技術が多くの人の命を守ってきたということは、驚きですね。

透析治療が普及して約50年、医療工学の進歩、透析に用いる薬剤の発達により、治療のレベルは格段に進歩しています。それでも24時間休み無く働いている腎臓の代わりをするには、週に3回、約4時間程度の透析治療が必要になります。最近では、寝ている時間を治療にあてる夜間透析や、より老廃物をしっかり除去し、食事制限を軽くできる長時間透析、自宅にしながら治療ができる在宅透析といった、様々な治療の形に発展しています。血液透析以外にも、腹膜透析や腎移植といった腎臓の代わりとなる治療法が複数ありますので、ご自身のライフスタイルに合うものがきっとあると思います。腎臓に不安のある方は是非主治医に相談してみてください。

病院からのお知らせ

提案書からの改善報告

本院では、患者さんへのサービス・アメニティ等の満足度向上を目指し、患者満足度委員会において、院内に設置してある提案箱へ投函された提案書のご意見から、サービス改善策を検討し実施しています。

現在、1か月あたり約50件のご提案をいただいております。提案書は、回収次第、現場で対応を進めるとともに、その後開催される委員会にて1件ずつ検討することで、院内のサービス向上に努めています。

サービス改善における主な対応については、外来棟1階中央待合ホールに設置されているモニターへ掲示しています。

患者さんが利用する設備や機器などは、日々の点検や定期的な更新を実施していますが、2025年度下半期では、特に以下の改善を実施しました。

〈外来棟1階処方せんFAXの改善〉

外来棟1階に設置している院外処方箋FAXについて、不具合が多いとのことを受け、新しいFAX複合機を1台導入し、設置致しました。



ナディック通信

Nagoya Disease Information Center



ナディックからのお知らせ

患者情報センター(広場ナディック)では患者さん自身が医療に関する情報収集ができるよう、一般的な医学書やパンフレットの閲覧、DVDの視聴等ができます。

〈利用時間〉平日10:00~13:00(休日祝日年末年始を除く)

※入院、外来を問わず、すべての患者さんにご利用いただけます。

「名大患者サロン」では、参加者同士の交流だけでなく、情報共有や病気とうまく付き合うためのプログラムも実施しています。

2025年2月には、肝臓専門医より「肝臓がんに対する最新の薬物療法」についてご講演いただきました。

【名大患者サロン 開催予定】

開催時間13:30~14:30

開催日	テーマ
2026年6月	乳がん交流会
2026年8月	認知症

※詳細については決まり次第院内掲示等でご案内致します。

特定基金 医学部附属病院支援事業へのご協力のお願い

当院では本事業を通じて、診療環境の充実、患者さんへのサービスのさらなる向上、先進的な臨床研究の推進を進めてまいります。皆さまのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

詳細は、ホームページまたは外来棟1階に置かれているパンフレットをご覧ください。

URL: <https://www.med.nagoya-u.ac.jp/kikin/hosp-kikin/>

QRコードでもアクセスできます!



禁煙のお願い

患者さんの健康をサポートすべき医療施設として、病院敷地内の全面禁煙を実施しています。皆さまのご理解とご協力をお願いいたします。

